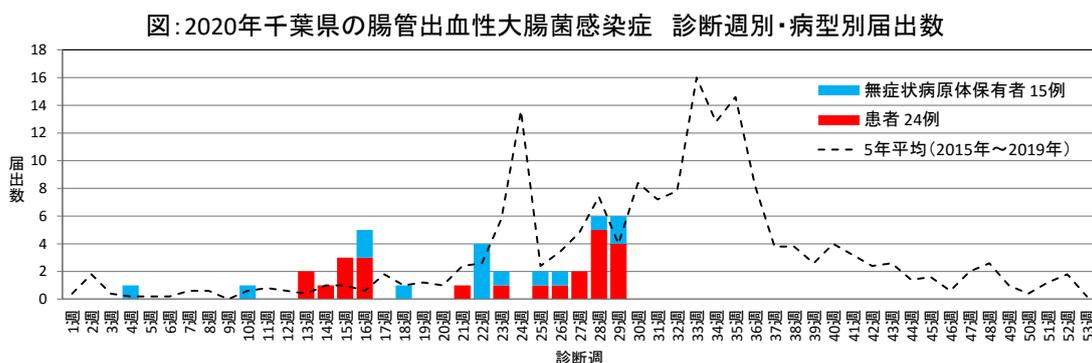


【今週の注目疾患】

【腸管出血性大腸菌感染症】

2020年第29週に県内医療機関から6例の腸管出血性大腸菌感染症の届出があり、2020年の累計は39例となった。例年同様、週当たりの届出数の増加が見られており、一層の食品の衛生対策、発生時の二次感染防止策の徹底を図る必要がある。

2020年にこれまで届出のあった39例について、病型は患者（有症者）24例、無症状病原体保有者15例である。



患者の年齢群は5歳未満1例、5～9歳6例、10代9例、20代7例、30代4例、40代4例、50代4例、60代1例、70代1例、80代1例となっており、小児や若い成人層の症例が多い(表)。

表：2015年～2020年29週千葉県の腸管出血性大腸菌感染症 年別・性別・年齢群別届出数

	2015年		2016年		2017年		2018年		2019年		2020年		合計	
	届出数	%	届出数	%										
性別														
男性	68	48.6	74	42.3	86	48.0	104	48.8	70	47.3	23	59.0	425	47.5
女性	72	51.4	101	57.7	93	52.0	109	51.2	78	52.7	16	41.0	469	52.5
年齢群														
5歳未満	11	7.9	18	10.3	20	11.2	16	7.5	9	6.1	1	2.6	75	8.4
5～9歳	13	9.3	5	2.9	16	8.9	13	6.1	5	3.4	6	15.4	58	6.5
10代	37	26.4	15	8.6	36	20.1	19	8.9	54	36.5	9	23.1	170	19.0
20代	19	13.6	24	13.7	37	20.7	45	21.1	36	24.3	7	17.9	168	18.8
30代	17	12.1	15	8.6	23	12.8	23	10.8	12	8.1	4	10.3	94	10.5
40代	9	6.4	8	4.6	14	7.8	21	9.9	13	8.8	4	10.3	69	7.7
50代	12	8.6	14	8.0	11	6.1	31	14.6	8	5.4	4	10.3	80	8.9
60代	11	7.9	10	5.7	9	5.0	23	10.8	8	5.4	2	5.1	63	7.0
70代	6	4.3	14	8.0	13	7.3	16	7.5	2	1.4	1	2.6	52	5.8
80代	5	3.6	31	17.7	0	0.0	5	2.3	1	0.7	1	2.6	43	4.8
90代	0	0.0	21	12.0	0	0.0	1	0.5	0	0.0	0	0.0	22	2.5
100歳以上	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
合計	140	100	175	100	179	100	213	100	148	100	39	100	894	100

39例のO血清群・ベロ毒素型は、O157・VT2(9例)、O157・VT1VT2(5例)、O157・VT不明(2例)、O26・VT1(7例)、O111・VT1(2例)、O111・VT1VT2(1例)、O103・VT1(2例)、O103・VT不明(1例)、O不明・VT1(5例)、O不明・VT2(3例)、O不明・VT1VT2(2例)となっている。

腸管出血性大腸菌感染症は、無症状から溶血性尿毒症症候群（Hemolytic Uremic Syndrome, HUS）を続発して致命的となるなど様々な病態をとりうるが、典型例では3～5日の潜伏期において、激しい腹痛をとまなう頻回の水様便の後に血便がでる。また37～38℃台の熱や嘔吐を伴うこともある。HUS、または脳症などの重症な合併症が続くことがあり、HUSを発症した患者の致死率は1～5%とされている。手洗いの励行といった基本的な衛生対策、食品の調理時における野菜類の十分な洗浄、肉類の十分な加熱や既知の感染リスクである生肉の喫食を避ける、調理器具類の洗浄、殺菌など交差汚染に対する注意が腸管出血性大腸菌感染症の感染予防に重要である。